

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「世界遺産」と景観再生： 円形土楼と囲龍屋の比較研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006062

第6章 「世界遺産」と景観再生

—— 円形土楼と厝龍屋の比較研究 ——

河合 洋尚

国立民族学博物館

1990年代後半以降、中国広東省梅県で「客家らしい」景観を建設する動きが地方政府の主導のもとに高まった。梅県は、客家と呼ばれるエスニック集団の本拠地の1つとして知られており、世界各地に住む客家の「故郷」でもある。地方政府は、海外華僑や観光客の知名度が高く、客家のシンボルともされる要素を多用して景観建設を促進した。そのうち目玉となったのが、世界遺産に認定された福建土楼を真似た、円形土楼型の近代建築であった。しかしながら、梅県は、客家の主要な集住地の1つではあるが、歴史的に円形土楼が存在する文化圏ではない。それゆえ、梅県の地域住民のなかには、円形土楼を客家の文化遺産として認めず、厝龍屋こそが彼らの文化遺産であると主張する住民も現れた。本稿は、円形土楼と厝龍屋を比較することで、「誰にとっての文化遺産なのか」という問題について検討することを目的とする。

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1 はじめに | 3 厝龍屋をめぐる世界観と遺産実践 |
| 2 円形土楼型建築の拡がりと梅県 | 4 おわりに |

キーワード: 世界遺産、土楼、厝龍屋、客家、梅県

1 はじめに

ここ20年間、中国広東省の東北部に位置する梅県で「客家らしい」景観を建設する動きが高まっている。そのうち、地方政府の主導で、最も客家らしい特色を備えている景観として建設されるようになったのが、ユネスコの世界遺産に認定された円形土楼を模した建築物である。しかし、梅県の人々のなかには、この地にもともと存在しなかった円形土楼型の建物を建てることに対する、違和感や反発が少なくない。彼らは、昔から住んできた厝龍屋こそが本物の「客家遺産」とであると主張し、近年、それらを保護・再建するようになっている。本稿は、同じ客家建築である円形土楼と厝龍屋とを比較し、梅県の人々がなぜ厝龍屋を彼らの文化遺産として認知しているのか、またどのように厝龍屋を保護してきたのかについて、人々の世界観から解読することを目的とする。

客家とは、中国最大の民族である漢族のサブ・エスニック集団である。中国は現在、13億以上の人口を抱えており、その約92%が漢族であるが、同じ漢族といっても言語・文化のうえで多様性が大きい。漢族のなかには、言語・文化の異なる無数のサブ・エス

ニック集団が存在している。客家は、そのサブ・エスニック集団の1つで、客家語を話し、他の漢族とは異なる文化をもつと言われる [高木 1991]。一般的に流布している歴史によると、客家の祖先はもともと中原（華北にある古代王朝の所在地）に住んでおり、唐代末期以降、戦乱を逃れて中国の東南部に移住した。客家の祖先が東南部に移住した時、すでに土着の民族が住んでいたため、彼らは遅れて定住したよそ者（客）の集団（家）であるという意味で、客家と呼ばれるようになったという。

客家は、他の漢族にはない固有の文化をもっていると学術的にも社会的にもみなされているが、その固有かつ特殊な文化として最も有名なのは円形土楼である。本文中で述べるように、円形土楼は、福建省西南部に集中しており、そこの大半の住民が客家であることから、客家文化のシンボルともみなされるようになっていく。しかし、円形土楼は、梅県をはじめ、世界の多くの客家地域では歴史的に存在していない。だが、円形土楼が客家文化のシンボルになったことから、世界の客家の居住地で次々と円形土楼を模した建築物が建てられるようになった。それに対する各地の反応はさまざまであるが、なかには梅県の一部の住民のように、円形土楼をニセモノであると否定し、彼らの生活と密着した別の伝統家屋をホンモノの遺産として重視し始める事例も現れている。

本稿は、特に梅県において囲籠屋を文化遺産として保護する動きを、「遺産実践」という視点から考察する。本稿では、遺産実践を便宜的に3つの角度から捉える。第1に、地方政府、企業、団体などが、政治経済的目的から世界遺産である円形土楼をコピーし、管理し、利用している側面に焦点を当てる。第2は、現地の人々が実際にどのように円形土楼や囲籠屋を認知し、関わっているかについて論じる。もちろん現地の人々の見方は多様なので、筆者が観察した範囲内で、人々と文化遺産とのつながりを考察することになる。第3に、学者による文化遺産への表象と関与が遺産保護に及ぼしてきた影響力について検討する。それにより、多様なファクターが文化遺産に関与していることを明らかにすることで、現地での文化遺産の位置づけが、急激に変化していることを指摘することにしたい。

2 円形土楼型建築の拡がり と 梅県

2.1 円形土楼とその世界的拡大

円形土楼は、すでに客家のシンボルとして、中国国内や華僑・華人社会で知れ渡っている。土楼建築は、高い壁で囲む集合家屋であり、その丸いタイプは円形土楼、四角いタイプは方形土楼と呼ばれる（写真1）。

土楼建築は、福建省西部の龍岩市永定県とその周辺一帯に分布している。1998年、永定県政府は土楼建築をユネスコの世界遺産に申請し、2008年7月に正式に登録された。ユネスコに登録された土楼建築のなかには円形土楼と方形土楼の両方が含まれているが、



写真1 円形土楼と方形土楼

そのうち見た目のインパクトが強く、客家のシンボルとみなされているのは円形土楼の方である。アメリカ合衆国のニクソン大統領が人工衛星を飛ばした時、人工衛星に撮影された画像を見て、円形土楼をミサイル発射基地と誤解したという、逸話も残されている。



図1 中国東南部地図

多くの円形土楼が集中する永定県の絶対的多数の住民は客家である。このことは円形土楼＝客家建築であるとする根拠の1つとなっている。また、円形土楼は、客家が中原から南下するなかで外敵から身を守り結束して生きてきたことを表す、歴史的な象徴ともなっている。ところが、福建省と広東省の境界部分を歩いていて気づかされるのは、円形土楼は決して客家だけが住む建築ではないということである。例えば、永定県に隣接する福建省南靖県にも円形土楼が多く存在するが、その住民は福佬系の閩南人である。また、広東省潮州市の潮陽区や饒平県にも円形土楼がある（写真2）。特に、饒平県には過去に数千にものぼる円形土楼があった〔横田 2012〕。その住民には、客家もい

るが、福佬系の潮汕人も少なくない。つまり、生活文化の視点から見ると、円形土楼は、決して客家だけに特有の建築なのではなく、他のエスニック集団が住む伝統家屋でもある¹⁾。



写真2 潮州市饒平県の円形土楼

しかしながら、近年、円形土楼はイメージのうえでは、客家の代表的な建築であると表象されている。客家をめぐる概説書、マス・メディアの報道、博物館の展示では、円形土楼が頻繁に登場し、それが客家文化の特色として宣伝されている。戦前の客家をめぐる書籍を翻してみると、中国客家学の開祖として知られる羅香林の『客家研究導論』（1933年）では、圓龍屋は紹介されているが、円形土楼に関する記述が全くみあたらない。ほぼ同時期に日本で出版された『広東客家民族の研究』（1932年）でも、円形土楼への言及は皆無である。さらに1976年に台湾で出版された陳運棟の『客家人』でも同様に、台湾客家が住む三合院への言及はあるが、円形土楼には全く触れられていない。いま客家文化のシンボルとなっている円形土楼は、1970年代の時点では、驚くほど注目されていないのである。

小林宏至によれば、円形土楼が世界的な注目を集めるようになったのは、特に1980年代に入ってからのことである²⁾。1981年には『中国名勝事典』で有名な円形土楼の1つである承啓楼が紹介され、1986年には中国で円形土楼が切手のデザインとして使われた。また、1985年にはシンガポールの『客総会訊』で初めて土楼が紹介され、その後、円形土楼が客家文化のシンボルとして知れ渡ったのだという [小林 2013: 136]。他方で、1980年代後半には、台湾の黄漢民や日本の東京芸術大学の建築研究グループが、円形土楼の調査を実施した。1989年に台湾で出版された雑誌『漢声』22号では、表紙に円形土楼の写真が大きく掲載されるとともに、円形土楼特集が組まれ、概況から建築方法まで詳細に紹介されている³⁾。

上述のように、円形土楼はもともと福建省と広東省の境目にしか存在しない、局地的な伝統集合家屋である。しかしながら、21世紀になると、円形土楼を模した建築は、客

家のシンボルとして、土楼文化圏ではない地域で建設され始めるようになった。管見の限りにおいて、梅県のほか、広東省河源市、江西省贛州市、四川省成都市で円形土楼を模した建築物が建てられている。そのうち、河源市と贛州市では、テーマパーク内に円形土楼を模した建築が新たに建てられた。成都市では、郊外に位置する洛帯鎮で円形土楼を模した建築物が建てられ、現在は博物館として利用されている。



写真3 河源市客家文化公園の土楼建築



写真4 四川省洛帯鎮の土楼建築

さらに、円形土楼を模した近代建築は、台湾や東南アジア諸国にも拡大している。台湾では、特に1980年代後半に客家権利主張運動が高まってから、円形土楼が客家文化のシンボルとみなされるようになった。その後、21世紀に入ると、もともと土楼文化圏ではなかった台湾の各地で、円形土楼を模した建築物が建てられるようになっていく。例を挙げると、新竹市竹北鎮の国立交通大学客家文化学院、苗栗市高鉄駅付近の観光サービスセンター、台中市東勢区の高等専門学校、高雄市新客家文化園區のレストランが、円形土楼型の建築物を模っている。また、ここ数年、マレーシアとインドネシアにおいても円形土楼を模した建築物が次々と建てられるようになった。マレーシアでは、華人人口のなかで客家が過半数を占めるサバ州のコタキナバルにおいて、円形土楼型のレス



写真5 高雄市新客家文化園區のレストラン



写真6 コタキナバルの客家レストラン

トランが地元の客家団体により建てられた⁴⁾。また、最近では、華人人口のなかで客家の比率が少ないペナン島でも円形土楼型の建築物が建てられたという⁵⁾。

このように、円形土楼は、もともと福建省と広東省の境目にしかない局地的な伝統集合家屋であり、必ずしも客家だけが住むわけではないにもかかわらず、客家文化のシンボルとして世界中に拡散している。特に、梅県では、1990年代後半という早い時期から円形土楼型の建築が建てられ、21世紀に入ると博物館、レストラン、マンション、体育館などさまざまな施設で円形土楼型のデザインが採用されるようになった。次に、梅県の事例に絞って論じていくことにしよう。

2.2 梅県の客家文化政策と円形土楼

本稿の研究対象である梅県は、広東省東北部の梅州市に属する。中国全体から見ると広東省は経済的に豊かな省であるが、そのなかで梅州市は、交通の不便な山岳地帯にあるため、広東省で最も貧困な行政区の一つであった。現在、梅州市全体の人口は約500万人であり、その99%以上が客家である。梅州市は、2つの区（梅江区、梅县区）、5つの県（蕉嶺県、平遠県、五華県、大埔県、豊順県）、1つの県級市（興寧市）を管轄している。本稿では、そのうち都心部とその郊外にあたる2つの区を梅県と称する。

図1でみるように、客家の居住区は、広東省、福建省、江西省の省境にあり、ここから海外に多くの客家が移住したことから、この一帯は「客家の故郷」（客家原郷）と称されている。なかでも、梅州市から海外に移住した客家の数は多く、分布地域も台湾、東南アジア諸国、インド、モーリシャス、オセアニア、アメリカ大陸、日本など広い。海外に移住した客家のなかには成功した人物も少なくなく、経済界ではタイガーバーム社の創始者である胡文虎、政界ではシンガポールの建国者であるリー・クワンユーや台湾の元総統である李登輝らがいる。それゆえ、中国が1978年に改革・開放政策を実施し市場経済原理を導入してから、梅州市にとって、客家華僑は地域経済を促進する重要なパートナーとなった。こうした文脈のなか、梅県では、この地が「客家の故郷」であることを外部者に見せるため、特に1990年代後半より、円形土楼型の近代建築を中心とする景観を建設し始めた。

注目に値するのは、梅州市で「客家らしい」景観が建設され始めたのは、ここ20年ほどのことであり、それまで客家を前面に出した文化的景観はほとんど見られなかったことである。私が初めて梅県でフィールドワークを始めたのは2004年8月のことであるが、この時点ですら、現在「客家らしい」特色をもつと紹介される文化的景観は今ほど多くはなく、その大半は私が梅県に通い始めてから登場したものである。このことは、改革・開放政策が実施されるまで、梅県で客家の概念が民間には根づいておらず、政策的にも重視されていなかったことと無関係ではないだろう〔河合 2013: 210-211〕。梅県の政府機関紙である『梅江報』を翻すと、1980年代前半には客家を見出しとする記事がほとん

ど出て来ず、「客家語」や「客家文化」の項目で短文や女性の写真が時々現れる程度である。しかし、1980年代後半になると、客家に関する記事が徐々に増加しており、客家が1980年代を境に政治的な関心を集め始めたことが分かる。他方で、梅州市政府の華僑事務局が編纂・刊行に携わっていた『僑声』を見ると、1980年代に日本の学者や東南アジアの華僑が客家を目的に訪問していたことが記されており、他者により梅県が客家として描かれていることを、この時期になってようやく政府関係者が気づくようになっていることが読み取れる〔河合 2013: 215〕。

梅県において客家が政策に取り入れられるようになった重要な契機の一つは、1988年にサンフランシスコで開催された世界客属懇親大会に、梅州市の代表団が初めて出席したことである。歴史学者である飯島典子〔2007〕が指摘するように、移住先では異なる言語や文化をもつ華僑が接触する機会が増えるため、19世紀に香港や東南アジアの華僑社会でまず客家の意識が芽生えた。1971年には、香港、台湾、東南アジア諸国を中心とする客家華僑が年に1～2度集まる世界客属懇親大会が始まったが、当初は中国の客家が代表団を派遣して参加することはなかったという。しかし、1988年にサンフランシスコで開催された第9回世界客属懇親大会に梅県の代表団が参加すると、彼らは世界の客家華僑の心のなかで梅州市が「客家の故郷」として位置づけられていることを確認し、もし客家というブランドをうまく活用したならば、世界中の客家が投資に来てくれると確認した。続いて、梅州市政府は、1989年12月に梅県で世界客家聯誼会を举行し、客家華僑を中心とする外部の実業家と、6億6000万ドル相当の外資プロジェクトの契約を結んだ。この時、梅州市の役人は、客家が外部者を引き寄せ地域経済を促進する重要な資源であることを再確認し、客家を文化政策に導入するようになった〔河合 2013: 216-217〕。

梅州市は、1994年12月に世界客属懇親大会（第12回）を梅県で開催し、その後、客家を政策に重要な根幹に据えるようになった。2000年には、「世界客都宣言」を行い、2003年4月11日には「文化梅州」政策を提唱して、客家文化を用いて経済発展を促進していく方針が強調された。そのなかで、梅州市は客家が居住し客家文化に溢れる〈空間〉であることが政策的にアピールされるようになったのである。実際、梅州市の住民の絶対的多数が客家であるが、なかには潮州人など、別のエスニック集団もいる。しかし、潮州人の居住区や彼らが経営するレストラン、温泉なども客家文化の名で語られるようになり、梅州市＝客家空間という言説が流布されるようになった。そうしたなか、梅州市の都心を含む梅県において、外部の者にこの地が客家空間であることを視覚的にアピールするため、「客家らしい」景観の建設が進められていくことになった。特に、1998年に福建省永定県で土楼を世界遺産に申請した頃から、その動きが強まった。

梅県の政府が客家文化政策を推進するにあたり、最も早く着手した景観建設の一つが、雁南飛リゾート開発である。1997年10月、広東宝麗華集团公司は、梅県の郊外にある茶

畑を開発し、そこにホテルや茶摘みなどのリゾート地を建設した。このホテルは、円形土楼の形を模してつくられており、さらにホテル内のレストランでは客家料理や客家歌劇を提供するなどの、文化的景観が創造された。続いて2005年3月より梅県を中心地で客家公園の建設が進められたが、公園入り口の門および公園内の中国客家博物館は、円形土楼のデザインに基づき建設された（写真7）。また、2006年3月には、梅江区の西南端に客天下リゾート地が建設され、円形土楼型のレストランのなかで客家料理が提供されている。さらに、梅県新城では、他にも円形土楼型のマンション（写真8）や体育館が建設されるなど、円形土楼を使った景観が次々と建設されている。



写真7 客家公園の中国客家博物館



写真8 円形土楼型のマンション

このように梅県では近年、外部者の客家イメージに合わせながら景観を建設するようになっている⁶⁾。また、地元政府は、文化的景観の建設を通し、梅州市が客家空間であることを視覚的に示し、外部者の観光・投資行為を誘致したり、内部者の客家意識を高めたりしている。その結果、梅州市が広東省で最も観光収益をあげている地区の1つとなっていることにみるように、政府や開発業者などによる客家文化政策や景観の建設は一定の効果をあげていると言っていることができるだろう。しかし、上述したように梅県における景観の建設は、外部者にとっては「客家らしさ」を感じるものになっている反面、もともと梅県には存在しなかったか少なかった文化的要素までもが組み込まれている。したがって、地方政府の主導で建設されてきた景観は、時として地域住民が思い描く景観とは異なるものになっている。次に、地域住民による景観への認知と実践についてみていくとしよう。

3 厝龍屋をめぐる世界観と遺産実践

3.1 都市開発への反発と厝龍屋の保護

円形土楼と異なり、厝龍屋は梅州市に昔から分布する伝統家屋である。円形土楼ほど

の高さはないが、数百名の一族が暮らせる集合住宅となっている。図2にみるように、囲龍屋は馬蹄形の形をしており、その中央には公共スペースである上庁、中庁、下庁がある。また、上庁の後方には化胎と呼ばれる高台があり、その前側面には五方五土龍神が置かれている。後述の通り、上庁から化胎にかけては、囲龍屋のなかで最も神聖な空間となっている。そして、これらの周囲にある中堂間、横屋間、囲龍間には人が住んでいる。



写真9 囲龍屋

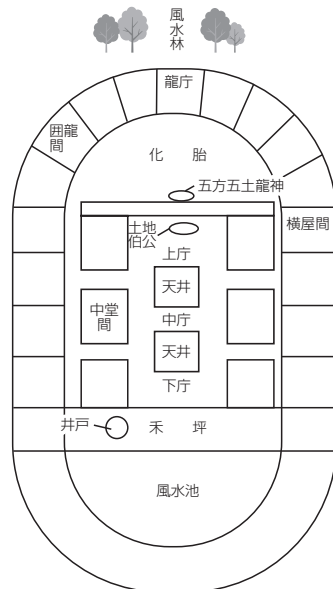


図2 囲龍屋の建築構造

囲龍屋のなかには数百年の歴史をもつものもあり、遅くとも民国期には建てられている。梅県のなかでも比較的勢力のある宗族は、普通の平屋ではなく、囲龍屋を建て集団で生活を営んできた。しかし、1949年に共産党政権が樹立すると、囲龍屋の公共スペースは生産隊により物置に使われたり、家畜を放し飼いに使われたりした。この時は非常に貧困で、衛生状況も悪かった。さらには、生産隊により、祖先を祀る位牌や、祖先の功績を称える扁額などが破壊されたのだという。

1978年12月に改革・開放政策が始まると、人口の流動性が高まり、梅県の中青年層は広州、深圳、東莞など沿海の都市に出稼ぎに出るようになった。それに伴い、宗族の囲龍屋離れが進んだ。また、梅県的生活水準も向上したため、宗族の成員は囲龍屋の近くにコンクリート造りの2～3階建ての住宅を建て、そちらに移り住むようになった。囲龍屋は近代的な生活スタイルに合わないとし、資産のある成員は次々と囲龍屋を出て、その周囲に建てた近代住宅に移り住んだ。逆に、囲龍屋に残った成員は、外に近代住宅を建てる金銭的な余裕がない貧しい層であった。また、梅県には人がほとんど住まなくなった囲龍屋もある。一族で住むという原則も崩壊し、住民の大半が出稼ぎ移民で占められるようになった囲龍屋もある。

地元政府をはじめ、厝龍屋に住んでいない層からすれば、厝龍屋は広い敷地を占めるにもかかわらず、すでに宗族により破棄された伝統建築であるようにみえる。それゆえ、特に都市部では、厝龍屋を壊してその敷地内にビルやマンションでも建てれば、より多くの収益を見込めることになる。こうした理由から、厝龍屋は人々の生活に密着してきた住宅であるにもかかわらず、2000年に入っても都市開発における破壊の対象となってきた。

しかしながら、実際のところ厝龍屋は、人が住まなくなったといっても彼らの歴史的記憶、社会関係、親族アイデンティティが埋め込まれた〈場所〉である。したがって、政府主導の都市開発と景観建設が進んだとき、宗族の成員は、政府が彼らの生活と馴染みのない円形土楼型の建築を客家文化の目玉として建て、逆に厝龍屋を壊すことに反感を覚えるようになった。ある宗族は、香港や海外にいる親族ネットワークを駆使して厝龍屋の保全運動を開始し、結果的に開発の魔の手から厝龍屋を守ること成功している[周 2006]。

他方で、筆者が長年調査をしてきたX宗族でも、厝龍屋こそが彼らのホンモノの文化遺産であるという意識を強めている。X宗族の間では、円形土楼型の建築物がニセモノとして評価されることが多い。全体の傾向として、年齢層が高いほどこれらの外的景観はニセモノであると認知しており、若い層は「真正なる」客家文化として捉える者もいるが、ニセモノと捉える者、全く関心がない者もあり多様化している。ただし、厝龍屋だけは老若男女問わず「客家らしい」建築物として認知される傾向が強い。円形土楼を模した建築物がニセモノとされる理由は明快である。というのも、円形土楼はもともと梅県にはなく、彼らは住んだことも目にしたこともないからである。とりわけ高齢者はこの建築が客家を代表する建築として急に示されたことに戸惑いを感じることもある。また、梅県の中高年の宗族のなかには、福建省の客家を客家として認めない者もあり、「円形土楼など客家の建築物ではない」という声も聞こえてくる。一部の中高年者は、政府や開発業者が彼らが住んできた平屋や厝龍屋を壊し円形土楼型の建築物をつくる動きに怒りすらあらわにしており、「なぜ我々の生活とかかわる本当の客家文化である平屋や厝龍屋を壊して、あのような見知らぬ建物をつくるのか」と不満を口にしている。

こうした状況のなか、X宗族は、宗族の研究会をつくって厝龍屋の価値を確認し、学者やメディアのインタビューの際には、厝龍屋の文化的価値を訴えてきた。それでは、なぜ宗族は、厝龍屋離れが進んだにもかかわらず、それをホンモノの文化遺産とみなすのだろうか。この一見矛盾する現象を説明するため、X宗族の事例を見ていくことにしよう。

3.2 厝龍屋の世界観

X宗族は、^{はんけいぼう}攀桂坊と呼ばれる梅県の下町に住む、梅県市内では有数の大規模な一族で

ある。X宗族が囲龍屋を重視する文化的背景は、祖先から伝えられたとする生命観や風水と関係している。

具体的には第1に、X宗族は、上庁を神聖視している。上庁は祖堂とも呼ばれ、祖先の位牌を置く所である。上庁では、一般的に土地伯公のうえに祖先の位牌があるが、それは土地が祖先を養い、祖先なくしては子孫もないことを表している。また、祖先の位牌の前にある天井（雨を貯める窪み）とあわせて、「天」「地」「人」の世界観を表している。

第2に、祖堂の後方にある化胎は女性の子宮を表しており、一族の生命力の根源であると信じられている。また、化胎の前側面にある五方五土龍神は、子宮の入り口を表しており、生命エネルギーの排出口であるとみなされている。それゆえ、X宗族では、病気になるったり不妊になったりすると、五方五土龍神に祈る習慣がある。また、春節の獅子舞の際には、獅子がまず化胎に来て五方五土龍神を祈り、それから各家庭を訪れるという習俗がある。これは、化胎の生命力を宗族の成員に分けるという儀式を表す。

第3に、五方五土龍神は、子宮の入り口を表すだけでなく、5つの異なる刻みがあることから、五行でもあると主張する成員が少なくない。というのも、彼らは、祖先が中原から移住したと考えており、中原の文化も継承していると考えている。他方で、彼らが非常に重視しているのは、祖先の功績を表す「進士」「文魁」などの扁額、及び、科挙の合格を示す眉杆^{ミーガン}という柱である。これらは朝廷から与えられた中原に関わる誇りとして、成員により重視されている。

これらの理由から、X宗族は、囲龍屋を重視し、これを破壊してはならないと考えていた。政府など外部者にとっては破棄された伝統家屋に見えるかもしれないが、宗族にとっては生活と密着し、祖先とのつながりを示す「生きた遺産」なのである。

そもそも政府は、囲龍屋を「価値の低い」過去の建築と位置づけ、宗族はこれを放棄して近代的な建築を選んだとみなしてきた。しかし、宗族にとって囲龍屋は決して過去の建築ではない。また、政府は、囲龍屋と近代住宅を伝統／近代の枠組みで捉えてきたが、実際のところ宗族はこうした二元論で考えるとは限らない。X宗族では、囲龍屋の周囲に近代住宅をつくる時、もともと住んでいた囲龍屋の部屋の寸法を測り、それを近代住宅にコピーするという工夫がなされることがある。そうすることで、囲龍屋の生命エネルギー（人によっては「風水」と言う）を近代建築に移行させるのである。つまり、囲龍屋と近代建築は「気」でつながっている。近代住宅は、囲龍屋の最新の囲いの1つであるともいえる。

囲龍屋は、普段は使われておらず、その周囲に人が住んでいるため、空虚な中心にみえる。それゆえ、開発の対象としてみられがちであるが、その中心には神聖な意味が付与されている。すなわち、囲龍屋は「神聖なる空虚 (sacred void)」⁷⁾としての性質を帯びているのである。

3.3 学術とメディアによる遺産実践

宗族は、かように囲龍屋を神聖なものとして見ていたため、1980年代に宗族復興が著しくなると、華僑の援助のもとで囲龍屋の修築を行い始めた。すなわち、囲龍屋の保全は何も文化遺産の概念が出てきてから現れたわけではなく、それ以前から存在する。ただし、文化遺産の概念が強まるにつれて変化したのは、囲龍屋をホンモノの「客家遺産」として位置づけ、客家や中原の言説を多用することになったことである。これには円形土楼型建築という視覚的なインパクトによる働きかけも関係している。

文化遺産としての囲龍屋の価値に着目してきたのは宗族だけではない。宗族の重視する囲龍屋の文化的価値を、文化遺産という政治的に有用な概念でもって言語化するのに助けとなったファクターとして、学者とマス・メディアの役割を無視することはできない。両者は一方では政府と提携関係にあるが、他方では政府と異なる価値判断の基準も有している。一部の学者やマス・メディアは、囲龍屋を梅県客家文化の代表であると捉えてきた。

囲龍屋の文化的意味についての記述は、すでに1933年に羅香林が『客家研究導論』で論じている。ただし、羅は、それを客家の建築文化の一例として挙げただけで、囲龍屋の保護の必要性については述べていない。囲龍屋の価値について学者やメディアが特に着目するようになったのは、1990年代に入ってからのことである。例えば、1990年8月31日の『梅江報』（第3面）では、囲龍屋のなかに陰陽五行、伝統中軸線のような中原文化の遺産があることが述べられている。他方、いくつかの学術論文では、囲龍屋の一部の建築要素（化胎、五方五土龍神、左右対象の建築構造など）が、陰陽五行、伝統中軸線、風水思想といった中原文化の表れであると繰り返し主張されてきた〔河合 2007〕。

ただし、上述の通り、宗族が囲龍屋を重視していた理由は、祖先とのつながり、アニミズム、中原文化など複数の要素があったが、特に学者とマス・メディアがアニミズム的な要素を強調することはほとんどない。アニミズムは「迷信」とみなされており、中国では文化遺産として認める対象にならないからである。だから、学者とマス・メディアは、特に囲龍屋のなかの中原思想を強調している。

だが、学者やマス・メディアが囲龍屋を「中原文化の遺産」として強調することは、結果的に、宗族が自らの手で「遺産保護」をおこなう契機にもなる。一部の（とりわけ梅県出身の）学者は、学者でもあり地元民でもあるため、「土楼は客家遺産」ではないとする見解を共有してきた。だから、J教授はかつて、客家博物館の建築デザインに円形土楼が選定されたとき猛烈に反対し、政府に囲龍屋こそがホンモノの客家遺産であると主張した。また、博物館関係者は、建築文化の展示コーナーに囲龍屋の模型を設置するなど、ソフト面では地域主義を前面に押し出す工夫をなしている。他方で、メディア関係者のなかには、宗族の有力者の学生や知人であることもあり、あるいは自身が梅県の出身者であることから、囲龍屋の価値に着目する者もいる。彼らは、宗族に囲龍屋の価

値についてインタビューをし、囲龍屋における中原文化や祖先の功績といった遺産をクローズアップする記事を書いている。

こうした囲龍屋を再評価する動きを受けて、政府は囲龍屋の存在を無視できなくなってきた。21世紀初頭からの囲龍屋開発反対運動の動きを受けて、政府は囲龍屋の保存を考慮する方向に傾いた。また、梅州市政府にとっては、土楼に代わる地域の特色をつくりだす資源を発見しなければならなかったが、囲龍屋は絶好の対象であった。こうした理由により、2009年4月10日、梅州市政府は8年の月日をかけて囲龍屋をユネスコ世界文化遺産に申請することを発表したのである。

3.4 宗族による遺産実践

囲龍屋は梅県に数万件あると見積もられている。したがって、政府は、全ての囲龍屋を保護するわけにはいかないが、2009年以降、一部の囲龍屋を市や区の「文物保護単位」(有形文化財)として指定し始めている。市がどの囲龍屋を文化財として指定するかの基準は今のところ定かではないが、歴史が古く保存状況が良かったり、有名な人物を輩出していたりするいくつかの囲龍屋が、すでに文化財に指定されるようになっている。

X宗族のある囲龍屋もまた、一族に著名人がいるため、その人物の「故居」という名目で2011年に区の「文物保護単位」に認定された⁸⁾。ただし、X宗族は、その囲龍屋が文化財として認定される前に、自分たちで出資して囲龍屋とその環境を整備する努力をしてきた。前述の通り、彼らは円形土楼型ではなく囲龍屋こそが保護に値するホンモノの客家遺産であると考えてきたからである。2008年8月、X宗族は、囲龍屋の前方の禾坪を改造し、そこに祖先の功績を称える眉杆を立てた。さらに、2011年12月に区の文化財として保護された後、囲龍屋の景観に2つの大きな変化が生じることとなった。

一つは、祖先の功績を称える眉杆および扁額の建設が加速したことである。2013年になると、梅県政府は「客家らしい」景観の建設を促進するため、各宗族に対し眉杆を立てることを推奨するようになった。これを受けて、X宗族では、文化財に指定された囲



写真10 囲龍屋の前に建てられた眉杆



写真11 祖先の功績を飾った扁額

龍屋だけでなく、本家でも22本の眉杆を立てた。宗族の成員の話によると、1対の眉杆を立てるには5,000元（約10万円）が必要であったそうだが、成員たちは金を出し合い、2014年には22本全てが立てられた（写真10）。また、「進士」「文魁」などの文字を刻んだ扁額も修理し、囲龍屋の下序に飾った（写真11）。このようにして、X宗族は、目に見える形で彼らの祖先の功績を遺産として残すことに努めたのである。

もう1つは、共産党革命に参加した一族の成員（将軍）を記念する部屋を囲龍屋の一室に設置し、彼の写真や遺物をミニ革命記念館として、そこに展示するようになった。これは、客家が愛国主義精神を強くもつとする言説を体現するとともに、共産党のイデオロギーに迎合することで、囲龍屋を破壊から免れるようにしようとするものであるといえる。



写真12 囲龍屋内のミニ革命記念館

これらの2つの変化は、中原文化（政権とのかかわり）を誇示し、共産党政府の方針と足並みを揃えることで、文化遺産としての囲龍屋を保護する行為と関わりがある。こうして宗族の手で景観を再形成する一方で、X宗族は、囲龍屋に隠されたアニミズムのな要素を表立っては強調していない。この部分は、宗族の心の内に秘められた隠された景観になっているといえる。しかし、政府のイデオロギーに表向きに迎合する景観を再形成したからこそ、祖先から受け継がれたアニミズムのな要素を遺産として残すことが可能になっている、というパラドクスを見逃すことはできない⁹⁾。

4 おわりに

本稿は、梅県の宗族を事例とし、「誰にとっての遺産か」という問題を検討してきた。円形土楼は、ユネスコの世界遺産に登録されており、客家文化のシンボルとして世界的に認知されているが、福建省西部を中心とし局地的に分布する建築にすぎない。それゆえ、梅県では、円形土楼型の建築が出現するようになると、囲龍屋がホンモノの「客家

遺産」として見直されるようになった。この動きは、宗族から学術、メディアまで巻き込んで展開されており、2009年には市政府が囲籠屋を世界遺産に申請する宣言をするまでに至った。梅県の地元政府が囲籠屋を文化遺産として認知するようになったことは、この伝統家屋の保護において大きな意味をもつ。2014年8月に中国客家博物館で展示されていた梅県の開発計画によると、梅県では近い将来、囲籠屋を模した建築物を保護・建設することで地域的な特色を出すことが構想されている。円形土楼だけでなく、囲籠屋も「客家らしい」景観を創造する資源として着目され始めているのである。

本稿の事例から明らかであるのは、世界遺産である円形土楼を模した建築物が、却って地域住民に何が彼らにとってのホンモノの「客家遺産」であるのかを意識化させたということである。この動きは、結果的に囲籠屋を次なる「世界遺産」として遺産申請するという、政治的行為を後押しすることとなった。つまり、世界遺産が次なる「世界遺産」を生み出そうとするプロセスを見てとることができるのである。そして、このプロセスにおいては、民間による遺産実践、および文化を表象する主体である学者やメディアの遺産実践が関係している。こうした現象は、住民にとって本当に必要な遺産とは何かという、リビングヘリテージ（生きている文化遺産）の重要性をめぐる問題としても、注目に値するものであるといえよう。

謝 辞

本稿は、広東省人文社会科学省／市共同建設重点研究課題「当代「客家文化」観的形成及其在民間社会的影響」（10KYKT08）の助成によりフィールドワークしたデータに基づいている。嘉応大学客家研究院のスタッフ、現地の方々、及び貴重なコメントをくださった方々に謝意を申し上げます。

注

- 1) 台湾の建築学者である黄漢民〔1995〕は、円形土楼を建設したのは客家ではなく閩南人であると主張している。
- 2) ただし、1950年代には中国で研究論文が一部で出されている〔小林 2013: 136〕。
- 3) 台湾高雄市内の高雄市客家文物館で保管している。
- 4) 2011年8月にコタキナバルで調査した時、円形土楼を模した建物はまだ建設中であった。地元の客家団体の者によると、この建物はサバ客属総会が会所とするために建てたが後に紛糾があり、レストランとして使用することに決めたのだという。
- 5) 2013年10月にマラヤ大学のDenny Wong教授より、また、2014年9月にマレーシア恩孝基金会の王琛発学長より聞いた話に基づく。両氏によると、ベナン島ではもともと円形土楼がなかったため、この建築物を建てることに対する地元住民の反発も大きいのだという。
- 6) 孔子廟と三山国王廟も客家らしい景観として政府の主導で再建された。まず、「儒学と勉学を重んじる客家の伝統文化」と位置づけられ、2006年に再建された。次に、海外、とりわけ台湾

で「客家の守護神」として信仰されている三山国王は、1997年にリゾート地として再開発された。両者が「客家らしい」景観として選ばれ、建設されていった背景には、海外の客家華僑により共有される「客家は勉学を重んじる」「客家の守護神である」といった言説が領有されていることによる。

- 7) デヴィッド・パーキンは、ケニアの事例より、一見空虚に見せる中心が聖性を強く帯びている現象を指摘し、これを「神聖な空虚」(sacred void)と呼んでいる [Parkin 1991]。ある意味で囲龍屋も一見して荒廃したようにみえるが宗族の心の中では神聖さを帯びていることがある。
- 8) 2011年12月に梅江区人民政府より区の「文物保護単位」として指定を受けた。
- 9) 梅県では、宗族が政府のイデオロギーに迎合する景観を主張するとき、「客家文化の継承」「中華伝統文化の高揚」「和諧」などの言説が使われている。この時、アニミズムや性器崇拝などの要素が強い部分は、言葉としては外向けに発信されないが、彼らの景観をめぐる行為に強く反映されている。

参考文献

●日本語文献

飯島典子

2007 『近代客家社会の形成——「他称」と「自称」のはざまで』東京：風響社。

河合洋尚

2007 「客家風水の表象と実践知——広東省梅州市における囲龍屋の事例から」『社会人類学年報』33: 65-94。

2013 「空間概念としての客家——『客家の故郷』建設活動をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』37 (2): 199-244。

在広東総領事館編

1932 『広東客家民族の研究』外務省情報部。

高木桂蔵

1991 『客家——中国の内なる異邦人』東京：講談社新書。

横田浩一

2012 「潮汕の視点から見る客家文化の表象」瀬川昌久・飯島典子編『客家の創生と再創生——歴史と空間からの総合的再検討』pp.203-210、東京：風響社。

●英仏語文献

Lefebvre, H.

1974 *La production de l'espace*. Basil Bachelor.

Parkin, D.

1991 *The Sacred Void: Spatial Images of Work and Ritual among the Giriama of Kenya*. Cambridge University Press.

●中国語文献

陳運棟

1983 『客家人』聯誼出版社（原本：1978年）。

黃漢民

1995 『客家土樓民居』福建教育出版社。

羅香林

1992 『客家研究導論』上海文芸出版社（原版1933年）。

梅州市華僑志編輯委員會

2001 『梅州市華僑志』星光印刷有限公司。

彭兆榮

2006 『邊際族群——遠離帝國庇護的客人』黃山書社。

2008 「帝國邊陲政治地理學對客家文化的影響——以福建寧化客家族群建構為例」『客家研究輯刊』33號、pp.1-9。

小林宏至

2013 「客家建築研究與現代人類學視角」、河合洋尚編『日本客家研究的視角與方法——百年的軌跡』, pp.130-144, 北京: 社會科學文獻出版社。

周建新

2006 『動蕩的圍龍屋——一個客家宗族的城市化遭遇與文化抗爭』北京: 中國社會科學出版社。